

天の川の話

近藤 雅之

子どもの頃、九時になると火星があがってくるときいて、夏休み中頑張ったことがある。他方、早起き競争もしていたので、どうしても九時までもたずにひっくりかえってしまった。それまでそのころはまだよく見ていると天の川を眺めあかしていた。こうして見ていると天の川は天球上をうねうねと流れる帶に見える。よく注意する人はわかるが、天の川はうねりや細くなり太くなりはあっても天球上を一まわりしているのである。

ガリレオが望遠鏡を作ったとき、天の川はいっぱい星の集まったものだということを見つけた。一八世紀終わり近くハーシェルが次の大きい進歩を齎した。^{もたらした}ハーシェルは天王星の発見で有名だが、そのほかにも多くの仕事をしている。彼は星の帶である天の川を見て



はじめて銀河系の形を描いてみせた。彼は二つの星がまわり合う「重星」の研究もしているから、星にはいろいろの明るさのものがあることはよく知っていた。しかし、まずどの星も等しい明るさと仮定しよう。暗い星ほど遠くにあると考へるのである。天のいくつもの区域で、明るさとの星の数を数える。そうするとどの方向がどのくらい遠くまで拡がっているかがわかることになる。ハーシェルはわれわれの見る星の全体が中厚のレンズのような形に集まっていることを示したのである。

天の川は太さだけでなく明るさも一様でない帶である。夏の夕の南の方向、射手座とか蠍座あたりの銀河は一番目立つし、真反対の双子座あたりはかなり淋しい銀河である。実際、射手座の方に銀河系の中心部があり、ふつうの光では吸収がひどいが、赤外線や電波ではもっと立派に見える。光でも射手座が中天高く見える南方に行けば、銀河系の中心と納得できる。

天の川は銀河赤道という言葉があるように一まわりしているのだが、その北極にあたるところは髪座という星座にある。その髪座がわれわれの頭上近くにくる時刻になると、ちょうど天の川が地平線近くで一周することになる。こういうことは実感してなかつたのである冬の夜半すぎ、望遠鏡の回廊から北の山際が異様に明るいので何かと目を凝らし、しばらくして天の川と氣付いて驚いた。四周围に天の川が見えるのである。自分が銀河円盤の上にいる感じ、天上の音楽が聞こえてくるようであった。もつともこんなに見える

のは中緯度にいるものの特権で、高緯度や熱帯では天の川全周を一度に見ることはできない。

もひとつ、関連して思い出したこと。まず北を向いていたせいか、佐渡に横たふ天の川を思いだした。小学校で最初に俳句を習う数句のなかに出てきておかしくない有名な句。しかしあたくしは横たふという言葉にずっとこだわってきた。この句は中天から銀河が落ちかかると捉えられてきたらう。天球を野と見做しそのなかを流れる川を横たふと表現する。ほんとのところは垂直に近く立っている形を横たふというのだらうかといふこだわりである。嘱目の風景を表す言葉としては適当でない。頭のなかを通過した表現になつてしまふ。もちろん、いわゆる嘱目吟ではない訳だけれども。文庫本の『奥の細道』程度ではいくら読んでもこの句が何時作られたのか、はつきりしたことがわからない。本文で七夕前後に置かれたのは厳然たる事実だけれども。あたくしは、もすこし前の季節に夜半目覚めた芭蕉翁が後架の窓からでもあれは何だらうとやはりいぶかしく思つたとでも考えてしまふのである。

火星のことは今にはつきりと記憶している。しかし、七夕に彦星が川を渡るか見ようとしたという記憶はない。さすがに小学生でも、そんなことは考えなくなつていたのだろう。逆に盈盈一水間脈脈不得語という詩はかなりはやく知つていたようである。

(天文学者研究者)